

1年後の学級の姿と

そのための絶対外せないポイント

加印いろえんぴつ 岸本ひとみ

みなさんがこの「学力研の広場」を手にしておられるのは、4月中旬か下旬でしょう。学級びらき、授業びらきも終わり、地域によっては初参観の準備が始まっているかもしれません。実のところ、今回のテーマについては、苦労しました。

というのも、この時期は、子どもをよく見て、基礎データを蓄積している期間だからです。「1年後の学級の姿」までは、イメージできていないからでもあります。

毎年、いろいろなクラスを担当しますから、課題のある子の特質、クラスの雰囲気、家庭的にしんどい子ども、などなどの長所や短所をつかんで、それに合わせて1か月ごとぐらいの期間で、目標を修正しながら、手さぐりで進んでいるというのが、実情です。学級づくりの基礎作業といえは言いかもしれません。

◇目標は「居心地のいいクラスづくり」

年令のせいかな、目標は「〇〇を超えるクラスに」「できるクラスに」ということではなく、みんなが居心地のいいクラスになることにしています。みんなの中には、もちろん担任である私も含まれています。

ですから、教室の中も雑然としていることも多いです。雨の日の休み時間などは騒然としています。トランプをしているグループあり、絵を描いているグループあり、カルタに興じているグループあり、読書をしている子どももいます。休み時間も整然としているようなクラスには、まずなつたことがあります。

ただ、毎回読書をしているような子どもには、隣でいっしょに本を読んだりして、そつと寄り添うようなことはしています。

子どもノート記入例

29 山川 幸夫	
4/7	偏食のため、給食を減らしてほしいとの連絡あり。
4/8	初給食。「減らして下さい。」が言える。
5/16	Aとけんか。原因はブランコの取り合い。擦過傷。保護者に連絡。Aとは仲直り。
5/22	逆上がり成功。大拍手。
6/23	プールびらき。水が苦手なようで、なかなか着がえられず。腹痛を訴えるも、何とか参加できた。

◇ひとりひとりの観察と記録の可視化

自分のクラスが決まったら、必ず作るもの。「子どもノート」です。サイズはA4判で、60ページノートを基本にしています。なぜか、コクヨのものが書き心地がよくて、ずうっとそれを使っています。

左のように、観察記録や保護者からの連

絡等を、日を追って記録していくようにしています。60ページのノートを使っていますから、1人分が見開き2ページになります。学習計画案と子どもノートを一体化したタイプのノートは市販のものがたくさんありますが、私の場合は子どもノートのみ独立させた形です。

この記録を取る可視化することが、毎年クラスづくりにたいへん役立っています。こんな例があります。4月はクラスがえ直後で、休み時間に一人で所在なさそうにしている子どもがいました。4年生女子ですから、5月になると、遊びが違う小グループに分かれていくことが多いのですけれど、彼女はどのグループにも入れない様子でした。5月前半は様子を見ていました。後半に入ると、教師側が遊びを組織して、女子グループを巻き込むようにしていきました。読書の時に彼女が「ちはやふる」を読んでいたの、百人一首を始めると、スムーズにグループの中に入っていくことができました。

子どもノートにメモ書きで「ちはやふる」と書いておいたことがヒントになったのです。

百マス計算に取り組む時にも、順調に記録が伸びていった子どもと、一進一退の子どもとの記録を書いています。「13引く7で計算ミスをする」「顔色冴えず、連続してタイムが落ちている」などと書いてあります。こちらにも、何日か続いたら、それとなく声をかけたり、個別に練習時間を設定したりすることができます。

大ききなようですが、こういった日常の記録の積み重ねが、子どもの微妙な変化を捉えて、タイムリーに手を打つために必要なのだと考えています。

余談。今年、1年と6年を担当した教えるの子どもが入学してきました。その教える子の1年生時のノートに「5時間目。絵本タイムで眠り込んでしまう。なかなか起きず帰る用意が遅れた。」とありました。家庭訪問時に話すつもりです。(笑)

◇実態調査(漢字と計算)

前学年までの漢字と計算の実態調査もこの時期にしています。問題用紙は、「〇年生の基礎学力」(無理なくできる12か月プラン) (フォーラム・A出版) に出ています。特に、高学年では、この実態調査を

怠ると、授業進度に影響が出て、学期末になつて大あわてすることになります。個々の実態とつまずきを知った上で、授業の中や、モジュールでさかのぼり指導を組み込んで、遅くとも2か月以内には、だいたいの教科でスタートラインがそろおうようにすることも、大事なポイントです。

学校の中で一番長い時間を過ごすのは、授業です。授業がわからない、ちっとも参加できないのでは、居心地がよくなるはずがありません。多動傾向やスペクトラム傾向を持っている子どもたちも、最低1時間に1度は参加できるように学習形態を組み込んで、授業の組み立てを考えていくようにしています。

当たり前のことを当たり前に、淡々と進めているだけなので、1学期の間は、何となく「うちのクラスはまとまりがないなあ。」「しまりがいいなあ。」と思うこともよくあります。でも、だいじょうぶ。遅くとも、教科書が下に変わる頃には、どの子どもも本来の力を発揮し始めます。これは、もともと子どもが持っている力を、伸び伸びと発揮できるようにする取り組みなのかもしれませぬ。